十二支戲文

特別
イ4
696
26

小寺
玉晁文庫

特
896
26

子 ごとのあかり

坦斎稿

子ども遊ハ其品多きが中に凧ハ大昔より伝はりし初学児童

子ども等の遊ハ殊にはやるハ上つ方より東坊ハ紙鳶凧の職人

格好ハ凧は若達とか角凧とか凧の唱歌國ニ人

家々の凧ハ霄ハ天井ニ至るまで候物凧を呼集の中にも凧乃

大将ハと下より参りて押上る凧ハ凧の中より向ニ而凧を

形師も大凧凧糸と違ひて而ヘ荒獅子男の子職の羽

下りし折ヨリ凧の道の十年以前より上て仁木

遊ニハ古きハ凧の絵を傳授して紙ハ凧を張ルハ長上下ハ

凧備ニて武者ハ凧羽三尺より早く乃し一尺ハ強き

書物には鼠の作る、觀自在くずれたる、飛鼠すゝむ鳴くは、土竜(?)を

蜀(?)流れの浪花風、孫のようには鼠婦をさまして、眠りし猫が鼠とても

猪(?)がさむらず神子には、ドブ鼠、ドブつとまるは、水鼠、心の中に住む大

鼠なし、今もって鼬鼠の黒焼は、瘧に効の大妙薬、天鼠の矢目の

美(?)鼠ゝ胆も用ゆべし、鼠粉子は升房の実、鼠麹は、五行ゝ

たとへのは、鼠花(?)のごとく、ちよりとも、鼠の毛あたまに、鼻は鼠の巣(?)の[illegible]

尋ねても、鼻は鼠の胡(?)麻子ちらす香勤鼠は、又上品銀鼠の波乃

袖から木(?)鼠、鼹鼠也、花鼠の皮を集めて鼠毛馬の鞍

帆かけは鼠足菌、一家は海鼠、鼠一壺、鼠下り[illegible]丈座、

鼠の嫁入りは、十日鼠、鼠と[illegible]みて、家年三年二ッ内に鼠茸、

啓(?)落して、春頒(?)の子の、若菜喜鼠、ハイヤイトは、甘茶と曽吉の

三女へ乞われ、年かれ、月鼠の、除まつるは、蝙蝠(?)虫に鼠

麝香鼠、鼠啖は鼠二寝て、老鼠鏡、老鼠瘡から、土鼠二埋、鼠溜、

鼠乳は皆痛君、鼯は鼠翅、鼠わなる鼠の耳も、艸の名なり、

鼠の髭を三本かけて、鼬くは後の上に置するは、筆にあるや、定で

鼠と書き舞、山水の樹には、鼠定名、貂鼠とは、栗鼠の別名

りて、李鼠も、鼯鼠の一名乙、田鼠は化して、鶉頼

阿闍梨の鼠は一件と書して、馬頭座、近鼠伝、但華古、

千成会の鼠糞は、本膳し鼠の究、能くと言ふ、又は鼠乃

阿留一、アッタトサトは、昔佛し落としには、なくして鼠の捕足したか、

殊に忿怒の体にて、南宮は林鼠坂、東は信州の鼠窟、所々方々より
ち廻り、首鼠が家は廣鼠、鼠が馬の尾、單子の支度をなしける、
関東方には、龍鼠鼠、負鼠ナル中ハ、倶利ヒミナフカサイ宴をフスベ薫
鼠、碩鼠、相鼠、合セテ六十章、章より七の札を以ては鼠食は華ゟ
明し、鶴屋の黄金に白鼠、水郷傳寿作白日鼠、鼠も
伴ひ、数多は、食蛇鼠、蹊鼠、鼩鼠鼠也、父鼠、山根鼠
鼯鼠より書經よりも、夜は深く環聲鳴に彭鼠、東破
の白窮鼠、卯の刻に喰猫、猫の肝の園を以て子の刻の時半が、
チュ チュ 棚の鼠がちらちらと、チューチューミミと云て白ス、

丑拾遺物語巻之二

目録

一 牛の復讐かくれなき牛頭の祖師を祈りし事

二 牛頭人身の人の忠義を形にせし話

三 牛皮の藥袋を以て牛黄を得し事

四 牛の耳をとして牛の角を直して治せし話

五 鬼牛降誕の戰ひの所々語付て牛を湖中に沈めし事

六 牛より生りあやしき人の事

七 牛の角を削りて牛頭天王の事

八 牛より水を湧き出ししより賢人の事

⑨ 斗と黒桂丹とはのきる名

⑩ 斗の蕃の風よなりきたるは庶言の文

① 今は昔越前の[illegible]にかしてもなく野羽の斗ありけるが

深の[illegible]式部斗の近衛の[illegible]馬寮主ありけり

其斗ども伏せる腹にかくれ居て鬼[illegible]と[illegible]の

天斗の[illegible]大君[illegible]七ら羽[illegible]

鶏をさまゝ[illegible]斗の力を用ひて下知[illegible]

由[illegible]斗裂の刑にもあらん斗の[illegible]

主[illegible]斗[illegible]斗[illegible]とて[illegible]有るものなれ

[illegible]斗[illegible]と云との[illegible]斗[illegible]斗[illegible]と

又[illegible]との大羽斗[illegible]たるとし其[illegible]

② 今は昔菅原の道真の大臣[illegible]文道の[illegible]

三

人会あはせる[illegible]附子の大臣[illegible]中[illegible]
所[illegible]附子の大臣の[illegible]紙[illegible]月[illegible]
白[illegible]以[illegible]草子[illegible]式[illegible]
[illegible]

四

の何某の[illegible]住[illegible]
[illegible]
今昔[illegible]
[illegible]

たちまち新たなりしにて、また手の角の如きものといひて颯颯
ままありてあるときにありて後家といふ唐土大宋の昔を
書きしるしたるや新村のしに舞の事にて私にて
相撲の起源のや也禰年のこと青きはむの弱き角抵の
備わりたる物をすてて後いまでいはく相撲なし
⑤文武も今の昔は蹴手の角にも国と争ふ故にや也。人の力ぞあり
漢の手若に書き字は手家をもって三尺のその手室に作る
西晋文帝にいふ士を集めて武を文尾手の九手に手属手西
手園手川手井手原手 山手引手相撲といふ勇士を就和と名
等大男手股武具の遊をして七尺余の力士をかへて唐の日鼻が

いつ手の類をかくして張王小倶利伽羅がこの戯をして舞の手
の角に托して後の事一度ならず勝負もあらそひ遊ぶ事もなし蒙求に
舞あるの如き戯をして平氏の名にて役の宗に浅ましく候あの
朝を支するのこと空しく三の手にて小戯古志気の民すの苟を記して
日本諸国にて関手に又何の者ある是を合ひ友猪膝の吉例を存ぞする
又あるも亘手の手の字は何手は蹴手の手にて候ら綱を
関するも是を扱ふ手力士と云ふ、壮士さては力をつくす
こ居の子をなす為しめて遊ぶ事にて云ふ相撲といふ手
そそ出来でたるとのなり事居し記とのる入るにいふ
⑥昔も今は昔年のその相の相名で杜甫の…おくへる

吾等の牛角ハ犬のやうな道を知り　精を從へ牛飼が家にて
牛頭の如き　文ハ丑の日より行ふと云　化りありし牛の飼方まさるとあり
きし　千年守るなるべし　五月に行はる大祭をする由　屋を建る
寛仁大度の君の　紹を立て教養有る　水牛の[illegible]
て化生を[illegible]　禅守らし　東風[illegible]
[illegible]　世の[illegible]

（七）
しかし牛ハ乗物に見　西行[illegible]
今ハ昔より[illegible]　牛の中夜[illegible]
[illegible]　牛[illegible]人[illegible]　牛[illegible]
[illegible]　文[illegible]　牛[illegible]　牛[illegible]

老子ハ金剛の[illegible]　牛の丑ハ[illegible]　寒中の丑の日に行ふ
求め[illegible]　牛の丑ハ[illegible]　周の[illegible]牛[illegible]
[illegible]牛尾魚[illegible]又牛の古[illegible]　牛居草の牛[illegible]
九牛草　牛扁[illegible]　牛心柿[illegible]　寺牛[illegible]
星牛[illegible]　菊牛[illegible]季[illegible]　金牛児
天の星[illegible]牽牛星[illegible]　大人の[illegible]牛
門に有[illegible]　[illegible]寺を祀[illegible]
将[illegible]の　百牛の圖を画[illegible]　孔明[illegible]
人[illegible]　木牛[illegible]　文[illegible]
諺[illegible]　牛[illegible]　楊[illegible]　[illegible]

ありがたき手本も古き名筆、望みても求め得がたき如く拙きものと
みなしてそのまゝ[illegible]此学生の物語をつゞけてしるすこれぞ松の

八 むかし鄭州の荒寺の庵に住まゐせる賢人の松の下に[illegible]其身

ともに過ぎ去るとの唐の武帝の流を鄭州の上手の跡を慕ひ[illegible]

王羲之の筆又その子が手を二筆書き兼ねて運筆を修めて諸国

に[illegible]書き習ひ[illegible]見る[illegible]いとも[illegible]詩書をもて今

手跡をなし[illegible]漢の清んずる[illegible]草書を学ぶ人[illegible]

遂に[illegible]秘密の手を[illegible]心に[illegible]出でて[illegible]賢人

の子丹倶手ならひて[illegible]の書をつゞけて孔門の十哲とも世人

あがめられき

九 古の今昔図の文字は[illegible]いへる[illegible]桃花[illegible]

[illegible]殊に[illegible]唐の世の書[illegible]梅[illegible]流[illegible]

[illegible]いまも梅の甚[illegible]劉[illegible]家[illegible]

[illegible]の[illegible]役梅井の手を見[illegible]朝[illegible]

[illegible]人あれば[illegible]して墨梅[illegible]自[illegible]

いやしき[illegible]語[illegible]流[illegible]

十 今の音手の筆[illegible]も天下一流[illegible]

[illegible]手[illegible]

[illegible]も[illegible]

[illegible]大家[illegible]一定の手本[illegible]

ききしは牛アリしと行道の後徐の牛と云ふ中にも大かゞ
村出をたゞやすく蓮の花をみる後世菩提を三ッびにかけてそ
牛ハすゞしき死して牛佛とおがまれけるも数よ和に捏ても
牛の塔を建るも女人にハ日光山など名をそ牛角をとるも
塔より別に霜牛塔と終る太子も偉人の星にて棒牛
とハ牛の棄てすゞと伴て躍てハ土の牛佛ある
に記事あり閑道の守りとなりて其名も妙ニ一

丑拾遺初編巻之一終

虎

古今亭亀寿

瞋迷言戯十二支題に虎とハ寅に配當す。白虎は百獣の
王として人ハ寅とハ社体の字なり。俤しく崇められて思ハ
蘋に婦して。所に翌を結ぶ如く。日頃の鋭気百倍して。今
樹ハ誇白いは虎髭撫ぜて謡れハ。弐人是を離して曰。御身のごとき
さうろふ事なれども。虎ハ千里の竹藪に住して人ハ藪醫者ハ顔して
得る所なれ自慢なりと思ふも衆人の足下にふみ下し物なれ。
暁の如く云ふと結る人ハ世にいふ常談の虎の威を借る狐の如く
魅されたり烏滸なりとハ。いふも嫉む心ぞ腹だゝしさに梅
さりし晋の馮婦が虎とつかみ車を下りしそれよりあとに猛く腕擦く

一家国荒れバ、社中の奴輩ハ猛虎を駆て群羊に入るが如く
跳梁して駆あわせしが侍衛しつ。両虎互に争ふ時ハ一虎ハ傷き
一虎ハ死す。其虚を図りて卞荘子が二虎を獲たりし例あり
暴虎馮河ハ孔子の戒。虎児の捕りて出るハ誰過ぞと諫め
めしに、虎が出ずして猫も出ず。勢ひ脱てすごすごと宿に帰りて
いぶかしバ虎の話を考えんとて、老の身は浪猟者の四性命
の三の口より伊勢大神の大麻より虎を倚母を伴いあれバ従来
皇国ゟ立き戦、千里の足ハ一備へバ唐山にてハ淵も行ける
白虎通すもとんぺうてぐ。又六韜の虎韜の谷や虎の巻ま
さわらか刻り。さとて一先休せん。虎屋饅頭でも喰つて

虎渓の三笑と一盃喫し。虎の尾を踏むが遁香で眼ハ道了
見まわれバ。毫端すざんバ効験なかりし。されバ昔の例にも漢の
李廣が虎と見て石に立る矢もありあれバ、およそ書ける文字あらん。
虎の穴に入らずんバ争か虎の子を獲んと三人合して虎となす。窮
言ひもよし。や猫んに筆を取し。寅一は夏の正月八寅の月。天子
ぬ虎賁三千人。苛政ハ虎より猛きのはなし孔子に似たる魯の陽虎。
虎狼の国と恐懼し秦ハ滅て漢の世ニ。寧成乳虎の喩え。
晋の代になりては名字を高く周處が斬る白額の虎。五胡の乱より
後趙の石虎で、水滸伝にハ五虎将軍も武松が虎を手搏し。
李逵が母を四乃虎を殺せし僚ハ目さむるべきかな

跳澗虎。錦毛虎。插翅虎なりし。魏もいさぎよき豪傑なり。孝子
の楊香ハ虎を叩て父を救ひ。又天竺の聖人。巴提使の隣ハ子の
餓たる虎を殺せし故事ハ。儀漢孝恙の一對なり。彼曽日使が
李と八虎の衛し例よりも。虎谿の三笑。豊干の虎。楚の方言
まハ於菟といふ。小説家にてハ大蟲といふ。虎をハ養て患
を遺し。虎とハ山に放の喩へ。虎を捕ハ易くして虎を放ハ
難しといふ。宋の胡銓が秦檜が頭をとへり。引おれバ高麗唐
山の故事ハ数多も謁ず。云くを耳遠くして労して功有
されバ前文にもいふ如く我 大皇國にかゝる物から。家康公
言に及べハ。高祖神君の岩帳なるハ 正月三日寅の一天に 誕生
ましませし福神の 伴間の因みなれバ初寅に参詣し。京都の地理ハ四
神相応。右西方白虎の位に 鞍馬の御山ハ丑寅の 鬼門鎮護の
霊場なり。東都の御城に虎の御門。尾張の御殿に虎の御間
同じ藩中に虎袮し 忝くも我
神祖ハ寅の童子の化現なりし。虎の尾を踏戦功より八 虎の皮の
御前に虎の皮の尾鞘をかけさせられし御用の力をとゞめて虎口
切脱四海を八紘も掌握したまへり。豊臣姓の功臣にハ加藤高
加藤虎之助。藤堂高虎。甲斐の猛将武田信虎
越前の右衛門長虎。群虎。大磯遊女の虎か小唄の虎ハ皇
め藪をく 我が障子 一重であるもさえ 舞の浦の虎外

櫻田三虎ハ加藤[illegible]
営中徳子なり

野らとも十扇故にハ虎のしも念力凝らる虎の尾。虎の綴の
五月雨天よ。ぢりりと鳴く雷の祥ハ即虎の皮虎狼
屋の漏るハ実に恐怖物ぞかし。虎の子渡す河に住。
水虎ハカッパの廣名なり。蟷螂蜘蛛ハ壁虎の和名。桜ヶ
虎の尾草よりハ虎河豚虎杖ハいたどり虎耳草ハ雪の下よ
草とかん虎毛の猫や トラムゲ(取掛)猫ハ蔵作ハ式亭の虎と称。
小三馬と以名を替らるハ桜田三虎も此頃ハ春営と名乗
改名して為永人ハ金子とならる。小児の診究ハ虎口の
三関病ハ白虎歴節風。茶ハ白虎加入参。虎肉丸より
虎脛骨とぞかし華用するがよし 文会の年寅の月寅の日

○坂田大夫先生
○慶會ハ渡辺ニテ
○真虎ハ大名なり
○阿白虎元東都柳橋ノ芸者ニテ尾州ニ住居ス今ハ剃髪ニテ

寅の刻限よ。誕生したる女の鮮血が瘤の奇薬よなる事ハ
浄瑠璃本の合邦辻まで最も委しく載てあり。虎御
前山ハ近江にあり。虎石府の西にあり。帯屋長右衛門住居和
手芸ハ白虎古捷ハ白虎弟なんぞが名人ぞ律形の
白虎が大儒なるが。慶會虎こハ高尾の真実虎ハ死せり
阿白虎ハ大なる。嗚呼龍虎がなる事を言ん。止むべく虎と虎
折ふし遍綱川に相撲ありし者[illegible]勝負ぶ付
[illegible]白虎が夢なるハ白虎の嘯を論じ儒者閑なり小相の
穿なるかとハキニニヤアと虎ヤアと説ずるに
言のも下手の長談議。ちかと虫の字虫偏丑三の白虎ハ

蛇ならで無雁に集めし和漢の雑俳も而斑駁(まだら)にて
虎斑の如き文体と漢語にいへば衣服(?)筆費の面ハ猿にて
肢体ハ虎日本流くハ福文章ハ虎を画きて狗に類すとかや
謂を淳(?)るハ元より筆勢(?)の用ゆる虎ハ鬼(?)とぞ成(?)り
嵐の草(?)疾(?)に岌(?)きて[illegible]べき紙が張(?)竜(?)の虎の下張に
あらハ世の中でも倭俳なるべし

寅

珎文館戯道人

鹿王ハ身を捨(?)橋と成して最後は児を渡し骨ハ[illegible]大きく貴
寅ハ鬼を打して其身の備を療治す[illegible]虎骨虎鉄
ハ治しがたき霜月中の寅ノ日ハ大黒天の縁日金高玉虎乃
御籤を嫌ふは孟春寅の日寅[illegible]霞谷伊吉の寅の九(?)
歳の籤をとらへて曲三味線より出る[illegible]姿を寅の毛
[illegible]ちがひの如く寅月ハ九め吉日に山中の雪[illegible]
みうつしめ物寅[illegible]寅の将頂がうらの
始まで似て[illegible]はふ虎の如く四月寅の日
の相[illegible]寿綱する[illegible]

何[illegible]奴[illegible]鬼角[illegible]

[illegible]男[illegible]

[illegible]一寸[illegible]

[illegible]川の[illegible]

[illegible]大[illegible]

[illegible]

しやうへ 其時無なみだと無る風よりて無おちつく

ゆしかま

無間の書を無しや無らぬと無しるかな

一無男か無れしき無名も無也

へアリヤア云ひが二見の縁が五人あらうさざめの名人をへく

よふ姑へてく以今も聞き入分半バト眼のまをおさへて

赤月川 是で鬼の郷りまでめロリ

巳

酔讃堂誌

一日硯に向ひて十二支の巳の題を授らんに蛇の蛙呑むが如く
身動きも得ずなりけるに二客あり来りて曰く子は何をか
案ずる干支に於て巳なしや何蛇斯蛇あるのみにて出来ず
如くは秋の彼岸の蛇の如し流石蛇こんとするとして客の
曰く余りとして一支を関はるは一指をさすの故なき蛇の道はへび
の手好もて家族も力を添へん蛇の邪魔も祝ひて一議あるか
いふ空しき遊ぶこと手力蛇道を頼む如く一客間て曰く
十二支の外十二支は皆其本名なり獨り巳をてらし謂ふは
めずらしき曰く小生の意を寄せて巳は三ありしかれ

尓こともあれハ極陽ならし陰気のはしめ是又大なるなり
蛇設し皐月名ニ巳ハ蛇（へミ）の人の字を象する也と
あるいハまたおもひかぬ蓬頭思に設
さて一笑して一献とそ周君の曰く両頭の蛇を見する
孫叔敖ハ人のために殺して死を免れ漢の高祖ハ道に
大蛇を斬てかしこまり詳也 川君の曰我家にハ
素戔嗚尊八岐の大蛇を斬りて八雲立つの詠あり
其尾よりいてたる剣ハ天叢雲の宝剣なり
我か割の国にハ大蛇の害絶へし又日本武尊
此剣を賜て東征しおはし大蛇の命をたすけ給へし

あるひハ田の水ハ冷しあるひハ湯の如く熱しけるとそ熱田と名付られし
あるハ（名）川椒又蛇本無足也為蛇画足と記しあれハ随侯見之
傷蛇以薬傅之後銜明月珠以報之といへるを蛇景
是又あるハ蛇の足又ならさるに及ひてまさに出しといへる其何
入てハ蟒蛇等といへる蛇を林なれハ蛇形なるも人ある
次第ハ小杉の丹波の所へ参りて武士なる者の
錦より小蛇の居所へなると大日本にて仲国に御帰還城
楽と謝しかる人も戦の耕なる蛇の尾も又蛇なるの
（名）荊の南川よ丈外の蛇湖のみ姓をあるハし常山の
蛇ハ孫子の所なり（にまた）婆文人ハ容色憔悴て

蛇身の人なら一生紅顔美人も容いひ　女媧氏ハ蛇身人頭を
許したれハ梁の武帝大蛇と対すれハ明日童子と落し
得てかハ彗星見西方に有騰蛇南にて義久の乱を起す諸
不成氏羅城坐の南りハ蛇出年上三つ草を揺風動百毒孫
起明に古掉尾の文章あり陸奥の棚倉の八蛇多く
しらくし任着れハ佐ミ良三八ツ娘の桃ハ蛇の因果なり
温の清姫蛇体に成し弥平山伏捕たる人ぞ
おそろしき物ぞ蛇ごろしなど晋書の楽広は明文に
答して盃得て蛇の影なりし故事の
老子曰史出せハ董京味禅師以羅三句弁にも川辺にありて

和漢の清談時とうつし主ハ閑口雖聴を得たれハ
二宮君摩耳と励しに蛇ならしハ果文字の為守つて
我従の蛇なるあらん索々其主やして素軒ハ
りんなまで耳に解譲なりと横りとれハ事漫蛇
庭にも成して草蛇のくるハ指南とよりひの蛇
蛇狸なりとの方蛇者ふ庭に年りよ我往して出る
中にさんとこにんハ二宮河暮りてこハ字随にし出て蛇
山海ニ桃好の蛇使ハ虺やハ蛇様背にり
蛇あらハ鳥蛇白蛇の名を世に知りやし見ハ窓を
手なるハおそれなく蛇を仰ぐくまでより十年

余りの事なれば龍蛇は上の事なれば江のしま女の
弁財天北條の時政に出て蛇と宵夜に出せ給ふ姫は
その事より世にありて蛇テナリまつる七ふ事の蛇頭
と見えしか蛇(じゃ)の口(ごりてり)ありてエイからくし大蛇なり
宮の大山の蛇を平(へい)と云ふ古代のそのかし此蛇頭は
かくのごとくの事のみにて蛇(じゃ)らくくと蛇ぐちと云ふし
まへに此ふれて女めし蛇(じゃ)でもしいまだ大蛇
前の蛇姫ともに乃りけれ行しも行し毒蛇
三人への一人の女はヨイ女(ナヒヂャ)蛇が蛇姫のことく似たる形と云ふ
蛇(へび)しるしは羽翁蛇たちの又一人の女は蛇身にて

志る(?)は國のかた人にて人ことごとく女のはき(?)也は
よりみて女蛇にれて二千年のまさらんかし平の
其の男人蛇包(?)また國が(?)ことしたまさらん
三人ありて男人蛇身(?)蛇にあらず此時なりし
このこともありて蛇にまりて
しかる蛇にふせもかしても人人たまかるかに(?)
蛇ありしと云ふ毒夜の人るきさんとなし
蛇のけにける
いらぬの蛇まで平の蛇の木のおいおうさ人に
蛇をみたると志るまかば 如しの蛇ありしる

蛇〻〻蛇虵蛇〻蛇ム蛇リ蛇ム蛇　蛇ゝ蛇
其こと座りかしこ太きる疑ふかくいそしてありけれハ
笑ひと濁りせよ　葉々かしめそしこの南んぶあん
まゝり蛇　蛇てしし関丈蛇まゝ同し　此巻ハ蛇ですす
すゝかゝよ八蛇

馬

倩馬鹿乃根源を尋るに唐秦の趙高か權威に盗鵝。
我朝にてハ尾張の国那古野に一社有。八天狗の
人しゝわ實ハ馬鹿の骨張なるん。其馬鹿天狗の
一人南ある未の葉天狗の由何かれたる鳥か獣か知れ
たる。馬鹿ハ縁の馬参し。無益の文を綴るん也。
痩馬より荷ハすくなしかし鐘含蓄ら給ふし。名馬
の磨墨ハすり流し難のかつらり筆ある駆足の延
足柏子足ハ相子の如く出馬せんに走ゝ出ても跡
ござる元来無かんの出馬杜鵑も知れば其如くなしちんば馬の

跡飛如くにやて發馬と邪しなれる。先正月ハ禁廷よ白馬の
節會を始とし白馬の停ハ建礼門よ帝へ貢馬を奉る。暦に
馬安ハ飛馬始。神の社よ神馬有。加茂より競馬の祭あり。前の
森よハ走り馬。鞍田の祭りよ馬の塔。其の古實ハ流鏑馬あるハ。
水馬の乗方ハ浮沓有。藪馬の山よ僧正坊。牛若は曹子ハ義經に。
弓馬の道よ長ケ玉ひ。一ノ谷の合戦よ。馬よて鵯越とこそなふれ
畠山重忠ハ馬の四足を引担ぎ難所を下し。大宮よ切たる坊が尾馬ハ。
龍慶安川よ困てある。又宇治川の先陣な。佐々木名譽の生喰
りくに。馬のさらぬ延ろし三段よ上へ羅りしも。偏よ智男の功よ。
平の宗盛愚味なれバ。仲綱が秘蔵の馬の木の下を取召し怨を

結びそり。後醍醐天皇の御時よ竜馬進
藤房不祥といさめし風。時代遥よる今ま来
尾よ嵐の巣をくふ夢を見をること不吉のきざし
馬場美濃守ハ君よ七馬士と云名有と傳
又利生上重の五歌仙よ馬の内侍ハ才女し。小栗ハ馬術の達人
岩高き忠馬の鬼鹿毛をさへ乗しと誇りし。佐野の常世ハ錆
長刀二振たる馬よ打乗て。お鎌倉へ駈つけ。和須給ひし
馬の目利ハ屋三の馬。是ハ織田家の侍にて。騎馬の武者のよくなし。
両馬が間よおどふる。かずハ軍よ書の文ハ。相馬の紋ハ繋ぎ駒
馬相馬内裏の百官名。平馬。司馬ハ加のに馬。兵馬。數馬と人名なり。

藤馬ハ蛍ハ粟田口。右馬首ハ戸隠ナリ。右馬允ハ津嶋の
祢宜也。左馬頭ハ明智武馬ナル湖水を乗渡る。近江の天守ハ
大かりそく。驚ハ猪を鳴ニ歩ヨリ。仏法具足馬屋元の皇女ま。
鎮我の馬子あり。馬鳴の神社ハ駿河なり。馬屋の神ハ
馬櫪神。仏ハ馬頭観世音。馬鳴菩薩ハいつくかたに馬頭ハ
かしやくの獄卒なし。巨勢金岡が画し馬ハ。ぬけ出て
萩の野を荒し。又元信の絵馬の馬ハ夜な抜て出る
ことも。惑と書くへ出ちしハ。剣をぬかば若君の
其時。行馬を用ひて前ハ雲居の荒鷹を闕たゞらバ
軒を鈎せし。鐙馬あり。貝を馬ヶ貝ハ思ハすう馬盗人の

名ハありつ。海馬ハ小き者ぐらゐ海馬よくかくとの聞。
出ス馬尾蜂馬大頭。馬蜩馬陸ヲ馬蝉馬蚊馬追もし。
竈馬ハ庭の隅ニ居る。草木りくハ馬酔木馬臼樹馬手葉椎。
馬藺馬薊馬歯莧。馬蓼神馬藻馬蕣草馬髪松り馬蕗草。
馬乳馬茸馬芹蒿馬蹄馬肝ハ硯の名。病の馬刀
瘀治しかつく。走馬才病ハ口なくし馬脾風小供の疳病
あり馬上杯ヲ馬尾作。馬把ハ農家の道具なりし
馬糞をとるハ蛇貝。馬明退ハ如いこのもと。唐周の武王の
時。馬を華山の陽に放ち。又穆王が八駿馬。秦の始皇
七馬有。漢の文帝ハ九逸馬。明皇ハ舞馬ありとあり

項羽ニは烏騅の駿馬あれバ劉備ハ的盧馬関羽ニ赤兎
馬孔明ニ木牛流馬あれバ又勇士ニは馬超馬岱馬良あり漢武帝
に汗血馬大聖孔子の白馬には一疋練の稱有又斉の
管仲ハ老馬を先へ進ませて道を知りたるも有し○の
司馬温公ハ君子なりしハ大丈夫駟馬の車に乗りて此橋
過ぎじと誓ひしハ司馬相如が一下昇仙橋
学者なりしハ馬融ぞし伏波将軍馬援あれバ後漢の陳の
勇将なりしバ馬遠ハ名画の中の一人なり馬遷ハ孟之反
生れし司馬仲達ハ死せる孔明が謀に走りしハ三国志の
按ずるにあやしき ちよと借りさるかし 高祖の司馬は

呂馬童あれバ馬師皇ハ古ゟ高名の馬醫に千里の馬を相し
たる伯楽今の世まであるのごとし美人の楊貴妃は馬嵬原の
露ときえ人間萬事塞翁が馬麒麟も老ては駑馬に
劣る磯言ハ秘蔵の○公孫龍ニ白馬の説あり岩高きハ
蜘の糸なる諺あり○不思議とハ是非の水滸伝の
天馬駿駆馬行ハ杜子美の作野馬ハ日本の未来記に見えたり○
戴宗ハ甲馬を足につけて日に八百里を行しとぞ○
又錦田仙の馬蹄の西廂記の路字も匹馬温公昊石
ま玄奘大徳の第と竜馬ゟ長く備え晋の時の
の大雪に玉馬と称し○珍説ハ馬頭娘ハ蜀の故事

されからも勝しき評也。伎儀の駙馬さ、墓を築くは馬鬣
封。馬韓は我が百濟國。風に嘶く胡馬塞馬、屠馬とハ
夷の馬なる。耳の長が驢馬、哆唱吧馬は斧ヶ亭。駱
駝も馬の類なり。征馬筆馬ハ馬の馬面馬の道て馬被
八ならば馬三階を採へ尽く。馬飼舎人馬預り。馬なぞのしし
羽織りたらし。馬乗袴ぐ、遠馬すれば下乗ハ人会ぐハ
落馬して木馬のるが海なん。馬場に馬見所馬も見れハに
大下馬先よ下馬札を出しくの下馬札内。馬の櫓をかぬ
し。寺社門ハ馬つなぎ。馬の乗の稲荷馬風、馬の斧
ありて父母子も馬の脊とる山道を。鼓らハ馬の毛りそうする。

馬皮が張りた太鼓うちはうちの馬の先途の稚訓語が
外馬の友駒も年銭に引わし馬、引うち馬ハ入会ぬ。
馬凡の如くぐんゆのひとの。野馬出し下女ハぬつりそ。
いつともの泊り馬のふし是ハ今世まちゆか称せず
流行は当世。善馬ぞし。何を言ふても馬耳東風
駄し馬とこふ人もの。何處の馬の骨ぞか知れぬ者
生き馬の眼をぬく。破落戸(アブレモノ)ハ親ぞか。しやとハ悪馬と呼ぶ
おとあしが如きの荒馬おくりしめ、両手をそろへてハ出ぞ
馬とふハ江戸通ニ云。右の股が馬手なれバ。顔の長が
馬面なるの。前陰の見事が馬陰同じの三ツ目ハ佐月馬そ。

むさい所ハ馬捨場。人喰馬も合口にあれバ馬の合ふやう
有馬ハ若毛をひくし。法度ハ人も知る当てハなからず
狐馬、儀年の脛ハ馬早りたまへバ施す馬よりおちて。聞違ハ安からず
烏倉馬りくとかくし遠馬替。法馬にても両替屋
手まもとてハ奴野馬や。精首ハ駿馬なるぞ。又将棋
龍馬ハ用捨のうへハ桂馬の高上りのおかるべし。先出ばる
かたの生れ馬、路を行バ後馬し。裸脊馬よりハ一番あり。汗馬ハ
鞭も早うて。籠ぬけとする曲馬宗馬よりも中へ入るも
仕つけハ後世も悪しくし。武家の献上大刀馬代。鞍置馬ハ引出
物。金の馬まへの大馬印。高峯馬引かする武士ハ馬持高ハ

三百石馬廻役相勤。君の馬前の塵を厭。御馬先の高名をせし侍ハ名利
まけず。川跡通行曲禄馬。労立てハ身を重んずる本馬。軽尾駄馬
蹈馬御免ハ家中にセアトコセイハ伊勢参り。三宝荒神の馬に乗る
ま馬借を。当番馬の宿[illegible]。池鯉鮒の馬市見物し。牛馬海道
おやすく。馬籠昇を手綱。洗馬の宿よハ江戸の町ハ大傳
馬町ハ傳馬丁。馬喰町。高田馬場ハ[illegible]
又浅草ハ馬道。[illegible]引馬の里ハ名所なる。畑馬ハ大根の荷物。敏馬
の浦ハ津の国[illegible]。義馬郡阿波[illegible]。馬伏塚ハ遠江。伊勢の国なり
長[illegible]馬郡ハ上野。但馬の城の崎温泉の[illegible]一
對馬ハ余計の[illegible]毛馬内ハ奥州南部。[illegible]ハ宗馬の

流れし。老駒ハおぼへ小馬よりハ北馬とむらふハ信濃路よ
高宮ハ行ハ老馬よりも牧馬ハ鄙俗の稽抛杯催馬楽唄ふハ
其むかし馬屋の行厨の猿廻し。意馬心猿ハ見る所もなし
人に多く存ずれバ馬ずれハ定まるなき春のさしあり
春駒ハ笑ひあへてこと人しれずや。三吉の何ときまるさらむ
騎馬でずんのかぎりなみの。博労のかよひは馬も有。ごでふの
かへり駒のふぐれかを好く潑皮ハうれかのおびし馬の三足ぬかて
しぐ箱根八里を馬でも敏よく。馬士唄らって馬方の八斎藤
大谷馬半が知居りて。廿五兵の馬の足役もあまりものか者あやかりな之れ
馬術ものハ大坪流。相馬経ハ書物なり。或班馬異同略

馬名合解ハ萬書りして。太平広記ハ著をうけ名をも馬杉
馬淵あれバ一馬とよみするもあり。江馬ハ大垣の藩師
あれど目がすり馬寫がよく利すなり。くまあのいづる人馬
半安敵。又ハ雅言の言月集楳馬吸言月集ニおしらく
千馬の小金吾盛し役。蹄齋北馬ハ浮世絵師。馬谷
馬英ハ軍書よみ。不高馬ハ噺の開山し。馬生圓馬金馬抔
ニおく今でのすらし家なり。三馬ハ戯作の浮世風呂に
人情うがちし妙案なる。馬琴ハ著述のすまり者をし八大傳の
小説ハ奇しき冊のしれ顧へずし。都其中に馬加大記ハ二なる
称げ人。青海波も逸馬みに。手の自欧頭おし抔。翁が例の

筆癖あらバそれ筆癖のちらすなれバ鬼ごもかくら馬琴振ひくてみ
笑へせめてなよかりて如月の初午まで待て手綱とりて手綱する
ちかまちい先あいたる安かこし正午は米の湯の汁のみて犬通へ
棒るる盛馬海して翅出しハ禮馬あて子供の田かの松の馬あるま
ざろりの麦る馬乳汲ほは無るし破身酒ニて盾摺弾の選
馬まで此馬づくしとふらる あと云加へ手綱かきりヤ
てアに何の駒しやいも兎の脚も思の草赤なとところハ
大度まよ者供へハ歌かこれじ先るまあハ退か房じまけハ
一きんの駆こミト云爾

猿

酔讃堂述

むかし〳〵祖父は山へ芝刈に婆々は川へ洗濯に[illegible]出し
猿の[illegible]猿は[illegible]深山の奥に年経る猿[illegible]
天狗[illegible]今[illegible]の鼻高[illegible]目口鼻[illegible]
[illegible]猿猴の手と長く[illegible]
猿の尾[illegible]猿[illegible]猿[illegible]
[illegible]
[illegible]馬の如く[illegible]百首[illegible]
一物[illegible]猿[illegible]馬[illegible]天狗猿猴が
月[illegible]人[illegible]

或は猿年を佳節として郡の福をまつるとハ倭猿律
祥のよし 莆門院の御製 存付金をも好む猿の
あらたまの年の好む我らがたのしみと 杜鵑しあれの年 今朝猿がなく
水の有る所をわたり 猿を猶ともからとす 猿猴は枝をつたふ
尾をみたしたる猿のなかやもぞ 足ある人のまへにもろもろ 尾をもてる
こらの猿の字や 猿と書くにし 支猿は朝三暮四の
故事ありけれハ 清の 猿もの 桂枝に
行する 猕猴あるけハ 黒衣の従の老猿ありて 白猿長臂ハ
手創を論し 樹にまとふ 白猿とありけり 穆王南征すれバ
君子ハ化して猿となり 又鶴となる 養由基荊にて

猿号哭し 鄧艾射ける 猿の母を射れバ猿の子悲しと
抜樹の葉を巻て 日と寒さ 巴東三峡巫峡長く猿鳴
三声涙沾裳 又猨死顛蹶而失木枝ともし書と
智者も千慮に一失あるとハ 猿も木から落るのことなりと
しるべ 楚人ハ沐猴而冠耳といひ 猿の烏帽子
かの心あるを 唐の孫恪か妻の袁氏ハ 峡山
碧玉環を出して 本性の猕猴と 美人の終ハ猿を
あまつるに 武帝を知りて 山谷 ありハ猿と虎
問答の奇談 養由基 厩中 猕猴従臂
胡俗秋日馬 馬の祈祷の 猴 古き事

句によし　蜂猿とは　射侯の音也と定まる　下山の巻猿には
大猿　小猿　など之をしと退　来先生も書れたる　猿猴　山門の
猿新らしく作り出しての　神猿とも言ふ　林猿　猿猴を
猿の例もあれと書の中に　心猿も要なし　猿枝の猿には
例は神の使り行はるゝ　猿田彦の神の御年にいはれ
まりて新　庚申塔には　驛路に多く　庚申の夜　猿を
陣中の夫に加へて弘め舟に乗せ　其名も先にあれ
三猿は見ぬ　キヤツといひて　言はぬ聞かぬを
三つの猿にとりなして　梅に猿とも　猿も有りけれと　詠みけるに
猿に似たる人　その心なるを　心猿といひしめけるなり

本願寺の三疋猿は　此世には猿もなく　山王の猿の中にも猿三疋
見まほしく　あまたの猿も出きて　山王の猿も出て　中の小猿
あまたの猿の中に　西行法師の事を言ひて
猿は見えて　下りて来ぬ　猿の声を聞きて
からす　犬の来ぬる所に来ぬる　猿の中に生まれ
小童の打ちける　童入りて　手習の猿の尻あかく　さへ
この猿しく　別に在る猿のこゝろにもあらぬ　猿尻流と云ふ
あの　初めて猿にも小業を習はしむとも云ふ　猿の
集といふ中には　年の猿に似たる猿の面を　山王の
鳥居の丹塗の　赤きが顔の色に似たれば　此の山の

異獣無二年に至て主人を嚙 太平寂(?)者の四尾の申楽して
鼓ハ猿の皮にて張れハ 猿舞の間縁あり 松の葉を以て
いまし(?)して其しりをもて文はりてしまへ是を猿まはし(?)ける
猿の皮を鞠にはりて蹴れハ 忘れかたし花の術を 古今冗(?)猿
是にて 大宮あれハ其まつりに 餘(?)もつくる ひとをしても 猿の
あり 諸侯は宮中の猿出て ハ 為(?)よりの後光(?)にする
東海の猿の舞ハ 今何花の姫と申て猿と化して
行円丈土にて 之を以て 二ツの猿ハ右にして 走る猿木へ至りし
云ふ始めの 梁孝王の苑に在り猿出てあれハ 石燕猿の
武威(?)しては夜は 是猿より猿もてハ 四圖にありと猿の棲(?)也

善光寺より大次(?) 河内の國の猿二島尻(?)に 柏猿ありて
百ヶ九日(?)の猿が出てしのびより 大典之年より 三にまぎれ猿児(?)
栖猿何(?)ありて 如若(?)あれハ箱根の 猿出て 猿屋(?)を
若し猿の猿長猿着間の壽あれハ 其の猿の手にある猿
西の國白岩にありて 千手の小猿の流(?)にあり 祝する猿の
菓を 食ふが如し 其の流ありて 盆猿の手を出して おへさ
との鳥に溢(?)海する流氷(?)の 齋(?)鳥の國の猿ありて 所へ 文て
も猿の一切の 在ル家(?)の 甚目寺の猿を抱き 婦人
胚(?)にて其の 海老尾の猿ありて 澤鷹の猿ハ 小判
兩の穀入て 武蔵守三萬ヶ萬の ある猿の形の事を三年に至る

心猿の心なんど其家の猿とのみならば桾櫏山櫨あるに猿の腰掛
多く猿抱猿胡猻猿猴草を植百日紅の猿滑にも猿と
めかせ猴の猿梯の皮をむすべる猿に小判と巳瀬よろしく
孫の猿の道具の瓦碑をも運ぶ方の大聲をせばくも多
羅なれども真似する嘘ばかりに猿耳にも猿眼にも抜
も犢と言ふなる猿若勘三郎寄年殊に高祖西八白猿之音に其顔へ
廿八下総の猿鳴郡の相馬内裡古の所をして連続する桃と竹の
先もはるか猿を下ろして上に指遊ぶは猿曳ても宇とぞ小猿を
およびて宝舟の文字の繪馬にも三番叟に猿まわしておの
猿之も学びて下り嗚呼浅猿と云ひ囲ふの天保壬年申の年

如き世も四季風の中の月庚申の日申の刻
お猿ならでは猿一見に誂く

酉

鶏其所にあるは何所の酉の年酉の月
酉の日酉の刻酉の方に向ひて酉元鶏酉陽
雑俎によれば鶏林鶏聲をば常にとなふ古天地未
剖陰陽渾沌如雞子溟涬而含牙又三五暦
紀に桃都山に大樹あり枝相去ること三千里
上有天鶏日初出て此樹を照らすより天

鶏卵鳴天下の鶏、皆是より起る。日本紀にハ
神天の岩窟へ入て盤戸閉させ給ふ。思兼の
神深謀りて常世の長鳴鳥を聚て互に長鳴
せしむと云。故に那波那岐登利と号す。皆鳥と
尊まれ、乃ち五徳を備へたり。頭に冠を
戴くハ文なり。足に距あるハ武也。敵を見て敢て
闘ふハ勇なり。食を得て相呼ハ仁なり。夜を守て
時を失ハざるハ信也。故に司晨の名を得たる。陳毅
昔生して鶏を好むの如く世の中鶏旦の鶏鳴り
鶏の如き書妻の方の鶏声の窪花文村の鶏鳴

其中にハ鶏合、楽を奏すにハ鶏婁、中楽を言にハ鶏
龍田狂言にハ鶏頭、鶏猫、渡辺の家の金の
鶏、一番なる新しき鶏、号と異名を得る宮の
鶏頭の鶏冠、家出の家の鶏鋪、大盤白
二本の鶏の[illegible]仰ぐべし。先来の[illegible]中世
上州の鶏の守鶏の書し。古の[illegible]世の中
鶏の[illegible]ものの[illegible]生花ハ[illegible]
名の鶏の花鶏築山にハ鶏冠木斗の[illegible]
根元一切ハ無[illegible]池にハバリ鶏鶏冠[illegible]
庭の鶏[illegible]野鶏山鶏三七ム遅羅國、[illegible]

けうえ文字ほど
ソメカケト有ハ
百済物の略語
今ニトリテ入ナリ

地鶏 鶏雛ノ産 鶏長なきハ絹のも有ハ
御名の男根と水鶏さるめと苦界にもなき
性秋なら鶏業分南にて体居の隠家ある西谷閑
も鶏を名を鶏朦朧の客も女郎の良くぞ
ウけよ鶏も眉も羽二重にもあげさすり末松鶏も雪ほどの事
信州ニテハ山鶏鶏一度会うて今鶏鄭鶏もさらに出し
親方もアノ客ハヨクコと云 鶏ハ外他所ニテハ花代
もしもせまいかしらめ入りる義も食
番屋での鶏無し五者の神がゝりしますと宮の持ち
小伏の喧の吹の俤似て鶏の雄斗とつて驚きて 古鶏

繪廼亭舎述

戌

搜神記ニ狗の異名を烏龍と云 其ハ文五色なるしといふ
槃瓠といふ 太平廣記ニ修羊公の名をもつて 猿なる事もあり
小鷹鳥りともいひ犬をも 大鷹鳥ともいへハ如何なる 小鷹をあさる
なしとも云 赤何何犬にて 猫をも思ひしに 養ひかゝる
犬の如しとあり 又喰ふに 是飼犬にて年とると云所との
たゝし 曽朝卿ハむかしの犬にも大極 丹席なと
相撲の宗盛ハ闘犬をこのみ 西風の黄犬
青犬を寺にし是を飼ふ 黒鳥と知らし 甘え
狸ハ金銀ともちらしたる 鐃 又勅勘をゆるし 翁丸

司馬相如ハ幼名犬子といひし事あり又ハ韓盧部郎
らしき南白ふる人也 狡犬まて童も報知る 八犬傳
の人々ハ雜ふしてもさだかなり 一犬虚を吠れバ萬
犬實を傳ふ 犬盡 吠天ふ犬 カイ星のごとへ
あしれハ 犬ハ地犬天犬あそし 華ハ犬鼻草大龍葵
犬交 夔 蕢 馬蓼 狗尾草 門を守るハ犬の役
京都ハ犬坂の 間者ハ尾陽の犬と取なれど
三韓の王ハ日本の犬となりて碑に殘せしも
物かへし犬もよる行ども棒に当り 其棒ぞ着ふ
ろも犬の交合ハならねしかるゝ雜をさらされ夫婦

喧嘩犬も喰わず 吐却に犬悦のよるへに垂れ
狛 氏あしかバ 機の道見て犬ハまのく 犬の足路海にて
致ハ則前田犬千代 犬猿の中毎見えぐるに大養乃
御所へ犬山街道の犬ぐしてや 行ありし 宮事ハ
犬若関よりハさへ行して 唐犬の權兵衛ハ 三犬女
浦乃犬追物に居られ 犬を喰まれしく 善知
鳥ありあれて 犬雁りに 青てるるをもん川ふく
犬喰ぐさしうるあもれ 狗猪にて猿ぐ犬
飼明神 — 四坐の犬神 — 三好犬頭犬明神
撫別 — 犬等古語も乃犬見え定つも祈郭 — て

秦の代の狗犬ハ一對[illegible]小犬
[illegible]宗の徽宗乃世に天下に[illegible]
狗を殺す事を禁しられけるも近くハ[illegible]下に
犬[illegible]にて[illegible]の[illegible]に
を婦[illegible]を婦ふとの殺[illegible]ハ
あまり[illegible]給[illegible]らん[illegible]
犬房丸の[illegible]あ[illegible]犬枕の[illegible]犬[illegible]
入[illegible]の[illegible]の白犬ハ呪咀せし[illegible]
祇園[illegible]の犬の[illegible]の時[illegible]流行[illegible]
白[illegible]小児の小便[illegible]犬犬の[illegible]

痛せ[illegible]も犬犬[illegible]人を[illegible]気質
全性の者ハ戌の年戌の月戌の日戌の刻より
五年の間[illegible]修験[illegible]の[illegible]体[illegible]
三稜石[illegible]戌の年
戌の月戌の日戌の刻[illegible]生[illegible]
[illegible]あ[illegible]犬[illegible]
全姓の[illegible]
[illegible]今の[illegible]
犬[illegible]の[illegible]様の下の[illegible]年
[illegible]中[illegible]犬[illegible]
[illegible]の[illegible]の犬[illegible]丑の[illegible]犬[illegible]

あくれば戌亥の隅のうら座の命の字の表して
犬にあらねど夜のさるく叢犬のほえぞ狐は
似たる廿月の年ハ獨鈷(エノコロ)根にて…如くことく
あれば名にも山犬ハ猟犬の尾の穴ざらざら奴
手とと取ざりけれハ犬骨折て鷹の餌食
と

亥

酔翁書記

亥ハ十二支の巻軸にて異名を大淵献或ハ黒面帝とゆへてされバ
摩利支天ハ猪にのりて玉へるも武家にも猪の形を是を夜の
亥の刻には摂津の猪名野の名所なるか有馬山猪名の笹原
知られたる大貳の三位家の文をつがゐ猪の代都の府に猪限あり
勇士にて猪の早太ハ猪の子五郎の義朝の十六騎猪股の小
平太源平の時代のいにしへ猪首と言ハれしも白猪の数
猪の目をすかし鏑矢を当ての名人ハ教経の前司盛俊をも討とられ
計略によりし猪武者ゆへに此度の富士の巻狩猛き古猪を仕留
し仁田忠常の忠心は稲富山の楊の陰猪を似せて御…

秀吉公のたいこ塊虎が推て西遊記の猪八戒といふ豈字の
道外方が忠臣蔵の五段目の猪ハ走て勘平が猪でなくても
旅人を殺すも残らず鎧の袖をふるハたる猪の息人道が似
趣画ハ寛政猪の年春日の毒虫ニ開かく當時の生年二矣
能書の名人東江猪飼檢校ハ琴の師匠にてよく故人となり
しが今でも猪谷ハ劔術の師範し海猪猪ノ助ハ猪才能ニ吉原へ
通の若者屋若草ハ深嫉の伏猪の床猪口で呑だる酒
でも新内節も語りて成亥屋と泊みの亥の子牡丹餅
おめでた為か書ハ猪の言葉天保十亥年の十月の中の
亥の子とて猪ゆかりて猪辞中の猪言葉を付て如くの如し

續學文章

青

藍より出て藍よりも青きは彼宇治の晋相が記にも青經を學ぶには以て青陽のあした青峯の青柳に心を意遣らん青蓮院の宮様は青驄の馬に青貝摺の鞍を置青總を掛青鳩色の直衣に青すじのアヅハ袖にて青襖の奴袴をそへたる青侍には青狩衣を着せて青木より奈良に立て青墻(ガキ)の花桜を見て青天に青油幕を張青莚に青疊を敷て御酒宴あそばしては御肴には青磁の鉢に青鯖(サバ)と指身とを盛て青味をあしらい藍草などを青竹の青筒とりて青柳には青羽を青海苔(アヲノリ)青菜青豆等を縁青硯にも盛て青繻の足つきに乗られける

木具ハ必ス又青貝を屋すへ置上られしも聞きおよび志られけむ
青年二十歳余りなりし青女ハ青花田色の衣着たるか
青葉の笛を吹出し青海波の一曲其色青きハ青ハ
又青青面金剛も是を視ハ耳の事をまかせて聞しん
藍ハ又藍も真藍其観音も是を聞ハ急龍なる青鮒呉い
給ハん所有難の音楽なりと謡へる声して青野所近が
参りけるか折から青空俄に青嵐のたちける青山の
中にあらはれて青鷺あかりうえに上りしかへ大なる青蛙舞首
始りて青首青頭青蘭草坪分て青三日足りしかも見へる柿へ
登りつ青猿へ移りしけるに青蛙を呑事於て始胎女の

青梅を喰けり是を見て其時空中より青鷺飛来て彼青
大将を引立て何へ行らん左せし所に又川より青龍出来りて
東の方より海は見えるを後者ハ皆々是又さらに色青ざめ
青息をつきたりける時青株座の鐘の上に青襖をおとし
青砥左衛門ハ藤綱顔も青も朋とて一腹立て兄弟の相もし進み出て高声にて
昔も晴天俄かに曇りて時雨しける所に和泉式部田舎から青
あまかりし事也我ハ左ありなりあれ僕俗も青二才とも云へ須
鳴とも見へ候を思いて青野原の我青墓の宿の宿り
し一夜青木流とうへ梅摩ハ旅居に居て夫より東部青山とて深
川より江戸へ住む樫青といふ咄し部語所て同郷より青竹を杉のなし

青海原を見れば灘青と流たるに似たり青嶂なる青巌凸凹
そびへて雲ハ青雲を戴き老樹青苔をとぢて幽邃なる是青嶋とか
いふならん此嶋唐船暫く碇をとゞむる風土の女ハ青々たる蜻蛉
めきたるいでたちにて其人物大の鼻形し男子ハ其色青黒く筆のごとく時青
鼻に似たり眼青眼にして毛髪ハ紺青の色をなし婦人ハ其色
青白くして髪青く毛髪ハ同色也衣裳ハ皆青梅縞を着し
家々にハ青簾を掛又青葉を以て垣を結ひ家々相並んで青畳を
しきて青蓮餅を食ひ又青粉をもて青麦をいれと
食文此地の如く青流汁ハ青海苔をもてし是を食するに其味
此知青菜を生にし草木ハ多くハ女青藍姫花青門

青高麗胡椒萬年青青鳥の鳥ハ青鴿青鳧青鵐魚ハ青箭魚
青鱚青鯖青魚虫ハ青蜻蛉青龍子等なり薬品ハ又多し其中にも
青塩青膝青葙子青龍豹青木香大青胃青青露葉青黛
青橘葉硫青等也林五郎は阿補嘚と云を鍛錬して云歌武に其音
此嶋より楽律を守りて青瑣と云観楽を青囲と云旧嶋を青翅
青冥或ハ海東青共云刀を青曹と云刀を青憤又青蛇と云或時何
嶋より青鷺鴛鴦青雲雀青きをぞ青鵲の嶋より青しとかや其珍しきいへ
遺したる目様をとりのやうに見しより紙に書て切の縁で青表の縁に青紙をふくべ
青苔のかかりて藍緑なる青楨何口の誰青銅何白誰青安何是誰
青眼何程誰と記し末の青肉にて形を写すなり或青青物所とら

又ハ手本の勾欄ニ有る聞傳ハ寺の行の外題ハ小野道風青蓮額に
表着杖の古書ハ居りて青陽堂と云見物ハ一向ニ青円すゝ先々
先をまなび青韓山青堂と云ふ文字ハ皆奇例の孫書の如くにて
仍ハ青葉の青表紙と云の面白きゝ青葉の苗色の
草紙本外にも古き青楼の辞書記ハ其帰る事青章すぐ書
男ハ摺の中に八類見ゝ其奇術と云ふ何かと云ふ
頃ハ加の冊子碧緑青紙ハ青白黒みとハ物の者
かしかきハ其鏡是とを如何にも色の物語れある物ハ
以の紙ハ鮮かとりんで其ん

白

醉讃堂輯

夫倉おのんたれハ人生まて先乳汁の白きにはじめ終に三夜の
白米をまもりたまふ長しも是よりの切積かく其さる其
白鳥の翼たる志闇白の面白き錦あかなき侯伯の白粉の
神の廣前ハ白和幣にて相撲敬白し佛の白毫ハ秋光
敬ひとし白衣観音ハ羊蓬の大悲の秋風錦ハ
白雲頭ハ仙の古原と白日夏日ハ外の見え
浴衣の染ぬ姪ひと人物大年の仙人の如く
北の出世ハ白楊の花とあぐる白居易の廣き
李白一斗詩百篇王維の耶ハ化の上の人と見る

孔門の弟子ハ勇を好める人丈夫らしき髭三千余すり鎖白とかく
辛の声をたて(か)しからき黄白なと云ハ其色に密すあんはけ
とまゐかの兵津白日本郎小松田の浦に素虫とらん乳ハ
真白なると白鷺に書加へてけし変家に立羽の識の白糸
幽墨守る所にしん心にはらもあかの鳥ある白相子あ
寸白鷺を離しける愛して白歯の…書きもせおり
し天の自然の者もけへ白髪のあかまちる菩の白鷺
を織りて見ものてつ素翁あらん者にあり一あん
陶淵明ハ白髪の人酒を賜しもあはぬ諸白出の法
目白鵯白白鼻白鼻の字もふるもみかの白きりまるとの

出ると好むし其初桜はるかに皇あるへし方寸の白傑紙に
書きさんにハ信ある公卿ハ唯白きを美称
せらる分ハ子と面白きを見し夫黄金の優なるもよく夜
燈の光を見る時の白き其しの白まことのあかの白昼たる遊を
踏将初の白ハ好もちら世に白皮の思ひある人ハ心をうくむしり
まあり彼の優美の家の白き花を瑞の人ありて並
殺乳汁も一たひ喉の入ハ白鳥ハ雪川にあまたる時ハ都を見と
用ひたる百穀を貴まさうの事に能緒を催しき
いそ愛かし白虹貫日ハ不吉の前表白沽蔵ハ…ぬ遊び
白色女川の松石白髭の神の姿…心をし齋藤別当ハ白髪を

浄く岩に蔵し例も有　又浄きことの言葉を思ひ出して曰
若の黄なるも水にあれは白水の如し　醉家の紅なるも醒ぬれハ
白面となる　白髭の社ハ鎌倉にて　白峯の社ハ讃岐なり　白髭明神
の神社なれハ　白峯大明神の祠なり　甘露寺に白旗の　白馬の節会
白馬の陣に白張神といふ　白旗明神も世にあるに　白馬を追ひ鳴ることも
白雲の乱れ　白雨の降りて　数寄の変化を見る　秋の白藏といふ事を
是ハ白の帷子なれハ故也　何との有も白の先なる事とかんや
彼座へ人合は白にて後の世もこしきを之ヤ客對
事有　一疋白けふ元上勝て　實ハ其の談に一筆を
葛原白川の猶　百萬遍若党あさんなり　秀吉の村井房

白木屋其外右に書なる白川までの物語を聞かせて　秋風より白屋
白人に関ありし　昔よりの恩の外に飯もらひ
老の膾家も亦人もあるかな　白妙の白
素通を書くも白紙の縞の中に墨の
事なれ　白粥は白味噌　白井氏へ
至り　城の内　大手の方を見て　浪
白の幕　始まりて　白鷺　下馬　進
皆白髪と　殿中ハ白木の白屋　白銀は
白の装束の長押ハ白象の白象　御座の　白髪
千文の五絶の一軸を出され　白鶏の身まで白羽の白澤の

香爐ニ白檀、床の白牡丹の花生ニ白玉椿を挿し、袋棚ハ白銀箔は
白菊を画き、杉戸ハ白鷺の掛子、鴨居ハ白檀の長刀を飾り、書棚には
四書・白文・白虎通・白雲・東明抄・白氏文集・三百首・白居易の
著述・新井白蛾の易書・書物あまた並へ、表白あり、側には白檀弓
側白木の弓を飾り、合鴨・白鷴・白雉の羽の矢、屏風ニハ孤
白鷺を画き、高楼ハ白虎楼と号し、加賀の白山を遥の
白嶺を見晴し、後園にハ白鶴・白鷺・白英・白頭花・白膠・白楊
白朮・白前草・翻白草・白膠木・十羽草・三白草・白芷・白英
白羽相子・白芥・白撫子・白丁香・白地草・白桃・白梅・白躑躅
と植、眉白・白鷺多く栖み、白頭蚯蚓多し、白泉水ニハ

白鯉多く、折節ハ白狐の餌食となれハ、白花米・蘿蔔を盛て白酒を
なし、此房白手を好み給ひけれハ、御饗ニ白頭鷹・白南鐐を愛玩し
適色も分りも白露白を事とし、白炭・白灰を分ち
慶の出御の上りけれハ、白米・白文の白砂糖を献上し
白扇・白紙を白木の台に据て、低頭して述れハ、白布の某執奏披露
ありけれハ、主殿頭大名にて、白髪長申さるハ、殿の御潔白を
好ミ給ふハ上ニ立ち手本なれハ、白浪・泥白の罪人なく、適白砂に
咲出てとものも、真直に白梓のとて、理非明白に決断まる事
備司の発し、今度白書流造畢の支、本海ハ白木にて
白木を手に持ちて、甚の之…遅く…

此御菓子ハ江戸白銀町の肥後屋より進上
致ス海鵜ならで白鷺ハ白湯にて浴ミて鵜の字白鳥
尾張ハ三郎より更に名付とこそしらるゝ也地名より
号ハ日本武尊の御由緒より名付し文白鳥の宮と申ハ
今白鳥と書すを云ふ字あれども文白鳥と言ふ名
白木の豆腐杉山と称し師長公の白菊の琵琶もあり
唐物と称し白塩ハ前原の名物白綿布ハ唐より
江戸へ積送る白醴白酒も國中の美ある也
唯し白髪ハ白晴白瀬ハ白濤白洲も
府もある大盤多くして自由し白蔵主の狐ハ

若を祭し山王白ありハ福井の白山の御使ある
白山の壮嚴を座ありハ白坂の雲貝寺あるも
白旗所より申も東西二行より中にありハ大宝
あれハ左もあるもん今日ハ御楽を多ありハ寺
羅せらるゝ也とて名ありより去ぬ赤白桃李花
白桂白須も日白蓮華楽催馬楽の西白
乃合うて芙蓉あらはれる楽器ハ小倉の白筆
白拂ハ治部の白筆白龍の琵琶と称す
白日暮ありとするに白米ハ白名白縮緬
あるを鵜ありとしる白日ハ世に知る人よ

思ふすゝめれ白兎様より者ハ佛も見て白人
諸鳥殿の白隼様ハ白兎元所弱白石こそ申し有
御鷹たるいかさま一重と挙白にて宿所
此ハ二字こそハ白骨の御文最中所存
門宗旨も座して睡り居けるかゝる中月代
あらで志ありくると志て在るみて白うも如かずまてら
あたるを志めて女房に黄鷹なる白きと
見れば鷹を取る宗旨も志るの時鼓とき
若くて主偽り如